

学習会 (子ども会) だより 2月号 後編
MY SKY 第19号
マイ スカイ

1996年2月27日火曜日発行(毎月第2・第4土曜後の火曜日定期発行)

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責:吉成正士

とうとうこのMY SKYも、残すところあと2回となりました。特に卒業生の皆さんや卒業生の保護者の方々に読んでいただくのは、本当に2回だけです。

そこで本号は、特に卒業生に贈る言葉として、綴っていききたいと思います。

ところで、つい先日「卒業式の風」が吹きました。と言ってもわかりませんよね。毎年この頃になると、湿り気を帯びた、少しなま暖かくてキナ臭い風が、突然頬を撫でることがあるんです。その風が吹く頃になると、少しずつ季節が変わり始めるんですね。それがいつも卒業式の前後なんです。この風が吹くと、何故か心がざわつき、嬉しいような、楽しいような、けど懐かしうで、寂しいような気持ちにさせてくれるんです。私はこの風が大好きです。皆さんも近づいてきた卒業式に合わせ、「卒業式の風」を感じてみてください。



◎解放教育(同和教育)・道徳教育・人間としての生き方を考える教育

つい先日、いくつかの感想文が届けられました。それは、本校の森口先生が徳島市内にある鳴門教育大学附属中学校によばれて、3年生の生徒さんにお話をしに行ったときの、生徒たちの感想文でした。まずはその感想文の一つを読んでみてください。

2月20日 今日森口先生の話聞いて、私は板野中学校の3年生だった彼らに「負けた」と思いました。それは、彼らの同和問題の授業に対するあの真剣さを見てしまったからです。私たちの道徳の授業の中で、あんなに真剣に考えて発表して、自分の思いをぶつけたことがあったでしょうか。絶対になかったと思います。やはりそこに「自分には本当は関係ない」と思う差別心があったからだと思います。同じ中学3年生で、あんなことが言えて、ちゃんとした部落への考えが持っていた彼らは、必ず将来、私たちよりずっと人間らしい生き方というか、道を見極めることができると思います。私の母が言ってました。「あんたは、幼稚園の時から附属で、何も社会の厳しさを知らんのよ。限られた人の中ですごしてきたけん、人間関係の難しさもわかってないんじょ」と。それを聞いて私は、あまり深い意味には考えませんでした

けれど、今日の森口先生の話聞いて、「母が言っていたことは、差別をなくすということにも通じているなあ」と思いました。何らかの形で差別されている人がいるとして、それを一緒に考えていくことは、からまっている人間関係のひもを少しずつほどいていくことになると思ったからです。

また、今日私は、今まで何を勉強してきたのだろうと不思議に思いました。今日の話を知ると「峠」も、その他の資料も、まるで違って読めると思います。なぜなら、例えば「峠」を読んで、私は「主人公の女性が親を説得できたのは、相手の男性と二人の努力と愛だ」などとふざけたことを言って、差別を理解していたように思っていたからです。本当の理由は、差別をなくそうと思う心があったからだだと思います。それに、今日森口先生が読んでくれた「峠」の招待状。あれは授業で読んだとき「二人は苦労したんだな」というくらいしか思わなかったけれど、「本当はいろんな人の思いや苦労が込められているんだな」と考えなおしました。でも一番大切だと思ったことは、本当に信頼できる友達をつくるということでした。私は今まで、同和問題をなくすにはどうすればいいですかという質問に「一人ひとりが同和問題を正しく理解する」と答えてきました。しかしそれは、同和問題を解決するための二番目の方法だということに、今日気づきました。本当はやはり、自分の気持ちを正直に、信頼しあえる友に相談する。そして一緒に考えるということが先なんだと思いました。

今日、もっと前に森口先生の話を知っていたらなあと思ったけれど、はたして1・2年生の時の私で、先生の話ちゃんと理解できるかと、自分に問いかけてみると、まったくその自信がないので、今日でよかったのだと思いました。

感想文の中に出てくる「峠」という資料。実は、一昨年文部省が出した「道徳読み物資料」という本の中に載せられた文章なのです。この文章、森口先生が書いたものなのですが、このときはじめて、道徳の中に部落差別についての文章が載せられたのです。はじめです。はじめ。だからそれまでは、部落のないところではどうしても「遠いところのお話」になってしまっていたのです。「道徳読み物資料」に載るまでにも、いろんな間違いがあったのですが、とにかくやっとこの部落差別が、学校教育の現場で全国区となったと考えてよいと思うのです。

けどそれにしても、道徳教育と同和教育（解放教育）。どこがどう違うのでしょうか。その違いを強調する人も多くいますが、私は、ベースとなると同じだと思うんです。「人間としての生き方を考える教育」だと思うんです。この前見た「亡国の

構図」を、同和教育（解放教育）として観た人もいるだろうし、部落問題と重ねた人もいると思うんです。その中で、正造はこう言ってました。

「知^ちありて徳^{とく}なきに苦しむなり。悔^くい改^{あらた}めざれば亡^{ぼろ}びん。」

知識ばかりを求めて、人間としての生き方（道徳）が廃^{すた}れてしまえば、どんどんダメになっていく。反省^{はんせい}をして改^{あらた}めないと、滅^{めつ}亡^{ぼう}してしまう。こういうことを、今から百年以上も前に正造は言ってるんですね。

ところで話が長くなりましたが、その資料「峠」をこの機会^{きかい}に読んでみてください。

とうげ
峠

『 生きるということ

愛するということ

相手のいのちを尊^{とうと}ぶこと

私たち二人は 永遠^{えいえん}に

真実^{せいし}を正視^{せいし}し

すべての人間を尊^{そんけい}敬^{けい}し

すべての人間を信^{しん}頼^{らい}し

美^みしさを求めて 生きていこうと誓^{ちか}いました

私たち 結^{けっ}婚^{こん}します 』

幸^{こう}司^じと恵^{けい}子^こは、やっとできあがった招^{しょう}待^{たい}状^{じょう}の原稿^{げんこう}を感^{かん}慨^{がい}深^{ふか}くながめた。この招待^{しょうたい}状^{じょう}が生まれるまでには、2人で乗り越えなければならなかった多くの峠^{とうげ}があったのだ

2人が教^{きょう}職^{しよく}について3年^{けい か}が経過^{けい か}した春^{はる}であった。

「恵子、もう結婚^{けっこん}を考えていい年頃^{としごろ}よ。だれかいい人がいるの。」

「お母さん、実は私……。」

大学時代^{だいがく}から交^{こう}際^{さい}を続^{つづ}けていた幸^{こう}司^じのことを思^{おも}い切^きって打^うち明^あけた。

その翌^{よく}日^{じつ}の夕^{ゆう}食^{しょく}後^ご、母^{はは}は険^{けん}しい表^{ひょう}情^{じょう}で恵^{けい}子^こに言^いった。

「あなたがお付き合^{おの}いしている小^{おの}野^の幸^{こう}司^じという人^{ひと}、同^{どう}和^わ地^ち区^くの人^{ひと}だということ知^しって
るの。」

「えっ……。」

恵^{けい}子^この心^{こころ}が一^{いつしゆんくも}瞬^{しゆんくも}曇^{くも}った。

「いくらあなたが結^{けっ}婚^{こん}しようと思^{おも}っていても、認^{みと}めるわけにはいかないの。」

「お母さんは、他人を差別するような人ではないと信じていたのに……。」

「人は遠くのことに對しては美しく生きられる。でも世間はそんなにあまくはない。あなたの結婚を認めたら、たちまち妹の結婚に大きな障害となってくる。見合いの話なんかは全くなくなるの。」

「それが世の中よ。みんなは自分にかかわりのないところでは、差別をなくそうということとは言えても、いざ自分自身の問題になるとそうはいかないの。」

いつもは口数の少ない父も、

「恵子のつらい気持ちは分かる。でもなあ、お母さんが言うように、恵子にも、私たちにも、妹の幸せを奪う権利はない。それだけじゃない。いどこたちまで、これからの結婚で肩身の狭い思いをしていくんだ。それが部落差別なんだ。」

恵子は返す言葉がなかった。

恵子には大学時代に友人から聞かされた言葉がよみがえってきた。

「小野君のこと知っているの。彼って、部落（被差別部落）の人よ。」

「付き合うの、やめたほうがいいと思うよ。」

「……。」

そんな恵子の一番の支えになったのは妹の励ましであった。

「お姉ちゃん、絶対に負けないで。私もお姉ちゃんのように世間に惑わされない生き方をしたいと思っている。お姉ちゃんが本当の幸せをつかもうとしているように、私もがんばっていくから……。」

心から応援してくれる妹の言葉がたまらなくうれしかった。しかし、恵子にはただ一つだけ気になることがあった。

数日後、恵子は幸司に思い切って話した。

「幸司は、私を信頼していない。どうして……。」

恵子の目には涙が溢れた。

幸司にはその涙の意味がすぐに分かった。幸司の心の中には、どうして自分から部落出身であることを語らなければならないのかというこだわりがあったからだ。

婚約までしていた相手との結婚が部落差別によって破れ、自らの生命を絶った幼なじみの姿が浮かんできた。絶望の中で生きる氣力を失っていった悲しみが、自分のこととしてわかるのだ。恵子のすがるようなまなざしが幸司にはつらかった。しばらく

く沈黙が続いた後、幸司は静かに語り出した。

「部落のことだろう。高校の頃、ふるさとを離れることばかり考えたこともあった。その頃は、僕にとって部落は重かった。でも今は違う。人間として、この問題と向き合って生きていきたいと願っている。人生には、乗り越えなければならない峠がいくつもある。二人で共に幸せを求めて生きていこう。」

恵子は幸司の言葉にうなずいた。

「両親は私たちの結婚に反対しているの。でもあなたとだったら説得できると思う。」
このときから大きな峠を越える2人の歩みは始まった。

「あなたのことは娘から聞いています。あなたはきっといい人でしょう。でも、世間にはまだまだ部落差別があります。親として娘を苦勞の淵に追いやることはできないんです。」

初めて幸司が恵子の家にあいさつに行ったとき、母親から返ってきた言葉である。幸司はこみ上げてくる怒りや悲しみを抑え、言葉をかみしめて言った。

「世間には差別があると言われますけど、その世間をつくっているのは、私たち一人一人ではないでしょうか。お母さんは世間という実体のないものを隠れみのにして、私たち部落の人間を差別しているんだと思いませんか。」

「どんなに言われても、親として不幸の中に飛び込んでいく娘を放っておくことはできません。これ以上娘をあなたの思いに引っ張りこんで惑わさないでください。」

母親は感情的になって語気を強めた。幸司は必死に耐えていた。部落に生まれたことがそんなに悪いことなのか。おれがどんな悪いことをしたというんだ。腹の底からつき上げてくる怒りを思い切りぶつけて、早々にその場を立ち去りたかった。

しかし、その後も2人は必ずわかってもらえると、両親を信じて話し合いを続けた母がいくら感情的になっても恵子は冷静であった。幸司も両親から訪問をこぼまれるときもあったが、恵子との愛を貫くために、繰り返し恵子の家に足を運んだ。

幸司は人間の生命まで奪ってしまう部落差別への怒りを込めて、かつて、部落という『かげ』におびえた自分自身を語り続けた。その思いに触れて当初かたくなであった両親も、段々とその本心を語ってくれるようになった。両親の悩みや苦しみは幸司たちにも理解できた。

人間は世間体というものにこだわり、知らず知らずのうちにお互いを傷つけてしま

う、そんな弱さを持って生きている。そういう生き方ではなく、人間としてその間違いを正していく生き方がしたい。両親との話し合いの中で二人がつかんだ思いであった。

やがて両親は幸司が帰った後も、お互いの胸のうちに恵子に話すようになってきた「差別される痛みがわかっているから、差別しない生き方をしようとしているんですよね。」

「人の痛みがわかるからこそ本当に優しくなれるし、悩みながらもがんばっているんだろうね。」

「人間、あんな生き方ができたら本当に幸せでしょうね。」

恵子には部落差別が両親を苦しめていることが手に取るように分かった。だからこそ、二人の思いを理解してもらいたかった。

やがて、両親は家族だんらん場でそれぞれの思いを語り合うようになった。

「結婚に^{はんたい}反対することを恵子の幸せのためと言ってきたけど、結^{けっ}局^{きよく}は私たちが差別されないかと^{おそ}恐れて、恵子を苦しめてきたのではないかしら。」

「そのことで私たちも苦しんでいたと思う。恵子の思いを大切にしていることが、親として当然のことだと思うようになったよ。」

「私たちが自分の『かげ』におびえていたんだわ。」

「私たちが自分の『かげ』をなくすことが、恵子を幸せにしていけることにつながるんだね。」

恵子は信じることの喜びや幸せ、人は変われるということをしみじみと実感した。

1年が経過し桜が満開になった春の日、恵子が両親に言った。

「みんなに祝^{しゅくふく}福されて結婚したい。お父さんやお母さんにも、幸司さんのご両親にも、心の底から喜^{よろこ}んでもらえる結婚にしたいの。」

「そうね。自分の子どもの幸せを考えるなら、他人の子どもの幸せを考えなくてはね。幸司さんの幸せは恵子の幸せなのね。」

「人を差別することは、自分自身も苦しめていく。差別は損^{そん}の分け取りなんだね。」

母親のあとに父親がつぶやくように言った。恵子はたまらなくうれしかった。大きな峠を越えたと思った。

翌日^{よくじつ}訪れた幸司に母親は語った。

「部落の人たちはかわいそうな人たちだと思っていました。でもあなたは人間としての誇りを持って生きています。そんなあなたを娘も尊敬しています。」

父親も身をのり出しながら力を込めて語った。

「私も、部落の人たちは、重い荷物を背負っている人たちだと思っていました。しかし、その荷物の中に私たちが入っていたことにやっと気づきました。君たち2人の本当に愛し合う姿を見て、私たちも共にその荷物のかついで生きていこうと話し合ったんです。」

2人でともし続けてきた小さな灯が大きな炎となって燃え広がっていく。

MY SKY第8号の「先生、実はオレそうなんです」という題で載せた友人から、先日の夜電話がありました。久しぶりに話したのですが、「やっぱり結婚の時のことを考えると不安だ」と呟きました。それでは解決しないこともわかってるし、今の彼女ともこの問題について話はしているのだけれども、どうしても手応えが感じられないと言うのです。

では、この手応えがどの程度感じられれば納得いくのでしょうか……。

これから特に3年生は、新しい社会に出て行くわけですが、今まで取り組んできたその情熱を、どうか一時のものにすることなく、部落内外を問わず、今あるつながりを確かなものにしていくとともに、新たなつながりを求めて、それぞれの進路先を揺り動かしていただきたいと願わずにはいられないのです。あなたたちは、この板野町で、人間としての生き方を考える学習を積み重ねてきました。そのことに、揺るぎない自信と誇りをもってください。そして、知（知識）、行（実行）、和（連帯）を自ら求めていく生き方を貫いてほしいと願います。知識を求めるため、自ら本を読み、また人から見聞きする。そしてそれを生かすために、自らが先頭にたって動く。そして忘れてはならないのが、仲間を求め、つながっていくということ。仲間にもいろんな仲間がいます。いろいろいるからいろいろな発想が生まれ、互いの刺激や勉強になるのです。同じ年代の仲間とつながることとは、知、行の基本になってきます。本当に大切にしてください。もし和を失ってしまうと、独りぼっちになり、何のための知か、何のための行かわからなくなってきます。同和教育（解放教育）は心が豊かになっていく教育ですからね、そうならなければウソです。

「……『実物に当てて研究せざれば、光を放つなし！』みなさんがせっかく学んだ新しい思想、その新思想をどうか闘いの実践の場において役立てていただき、「万民共生」、抑圧も搾取も、一人の生命も軽んずることなき人民による人民の政府樹立のため立ち上がっていただきたい。……」

